

第二十四回 齋藤茂吉短歌文学賞

秋葉 四郎 「茂吉幻の歌集」 『萬軍』

—戦争と齋藤茂吉—

岩波書店

選考委員

委員長 三枝 昂之

委員 小池 光

永田 和宏

馬場 あき子

【贈呈式】

平成二十五年五月二十五日（土）

（五十音順）

# 「茂吉幻の歌集『萬軍』」——戦争と斎藤茂吉——（抜粋）

## （一）二つの歌集『萬軍』

斎藤茂吉が戦時下に戦争を詠った歌は、『斎藤茂吉全集』（岩波書店）の歌集編第四「短歌拾遺」にほとんど収集、収載されている。しかし、それとは別に、戦争の末期に、八雲書店企画の決戦歌集に応じ自ら一冊の歌集として茂吉が選出し、浄書している『萬軍』という歌集が存在している。後に詳述するように、本来は世に出ているはずのないものである。それが私の知る限り二冊の歌集となつて、堂堂と世間に出て売られているのである。

一冊は、私家版歌集『萬軍』である。本扉以外は謄写刷りで、一ページ四首組、六十六ページ。奥付はなく、何時何者がどこから刊行したのか、一切分からない。山形県上山市の斎藤茂吉記念館が所蔵しているものを見ると、昭和四十五年の八月八日に寄贈されたものだから、それ以前に出たものらしい。

もう一冊は、昭和六十三年二月二十九日、紅書房刊行の歌集『萬軍』で、四六判函入、二首組百三十二ページであり、柴生田稔が「『萬軍』の特色一言」という文章を添えている。これは、仄聞によれば、著作権保持者たる遺族が正式に許可して、刊行されたものらしい（そういう記述はこの書にはないが）。

（註）昭和二十年、太平洋戦争の終末に、八雲書店が決戦歌集というシリーズの歌集刊行を企画する。斎藤茂吉も応ずることになって、上山疎開中の茂吉は毛筆による原稿を書き上げ、書肆に送ったが、届いた時には終戦となり、この原稿は使われず、代わりに歌集『浅流』が出される。茂吉は追放の身となったこともあって、自筆原稿『萬軍』を門人の佐藤佐太郎に預けて、この原稿は幻の歌集となるべきものであった。しかし、どういふ事情か、世に二種類流布したのである。）

この時点（註、昭和二十一年十一月）では『萬軍』の茂吉自筆原稿は伊藤禱一のところにあることになるが、その後茂吉の指示でこの『萬軍』原稿は佐藤佐太郎のもとに保管され、以後どこにも出されていない。佐藤佐太郎のもとに移ったのは、昭和二十一年五月一日である。茂吉自筆原稿の入った封筒に佐太郎自ら書いて残している。私は佐藤佐太郎門人として今、この「『萬軍』茂吉自筆原稿」を見得る立場にあり、その活用の許可も得ている。それ故に当然私には、少なくとも次の二つのことは明らかにする責務が課せられていると自ら思っている。

のである。

第一は、今世間に出ている二冊の『萬軍』は、佐藤佐太郎が長く保管した『萬軍』茂吉自筆原稿』に拠っていないものである。従ってこれによって検証し、もつとも正確な歌集『萬軍』を世に示す必要がある。

第二は、検証を経た歌集『萬軍』は、歌人斎藤茂吉の戦争を詠った作品の頂点をなすものと考えられる。少なくとも茂吉自らを選出した戦時下の作品集である。この際私は、現代短歌の実作者の一人としてこの歌集『萬軍』を中心にして、「戦争と斎藤茂吉」について明快な論考をしなくてはならない。正直に言えば、私はこの主題をながく遠ざけてきた。茂吉を愛読しながら、戦争の歌をどう読んだらよいのか、思いが徹底できなかったし、次元の違う反戦運動などのかかわりも面倒なことの一つであった。しかし、日中戦争の時代に生まれ、日米戦争一色の時代に育ち、敗戦国日本の戦後を生き抜いた歌人の私が、避けてはならないことでもある。

## 學徒出陣

青年のひとつごころは今なれや學問の道はたたかひのみち①

門をいでて戦はむとするときしもあれ一ときのみもたゆみゆるさず②

つねの日に養ひたりしたましひを明かにせむ時ぞ來にける③

全けきをささげまつらむ時は好し時至れりと學徒大進軍④

覺悟より覺悟に入りし極まりは精なる軍とこそぞりけるかも⑤

②自筆原稿は「門」にルビを付けているがA、B（註、謄写本と紅書房本）にない。他に差はない。全集補遺によれば①②は「甥等に与ふ」五首中の二首であり、後の三首が「學徒進軍」から選ばれている。

## 『作歌四十年』「くろがね抄」

①『學問の道はたたかひのみち』と続けたところに一首の特徴があった。

②「校門をいでてである。『門をいでて』とだけ云つたところに、やや暗指的文学的になつた味ひがある」。

※註は解り易くするため抜粋に著者が入れたものである。

●選考委員による選評

茂吉研究への新たな足場

三枝 昂之

昭和の大戦末期に八雲書店は「日本決戦シリーズ」という文庫版歌集を企画した。昭和二十年六月に十二人の歌人に原稿を依頼、七月二十一日に茂吉が脱稿して版元に届けたのが選歌集『萬軍』である。終戦で幻の歌集となったはずだが、なぜか戦後に謄写版刷りの『萬軍』と紅書房版『萬軍』が世に出た。二冊には不正確な部分があり、それを茂吉の自筆原稿と丹念に照応しながら改め、定本化したのが今回の秋葉氏の仕事である。作品の背景解説も細やかで、評論の色彩を極力抑えた地道なデータ提示は秋葉氏の誠実な研究姿勢の表れでもあり、今後の茂吉研究に不可欠な成果となった。

斎藤茂吉―佐藤佐太郎―秋葉四郎という直系の強い絆が可能にしたこの一冊の受賞を心から喜びたい。

克明なる労作

小池 光

斎藤茂吉の戦時下の作品を集めた幻の歌集『萬軍』について、戦後紅書房から刊行された同歌集、それに先行するガリ版刷りの『萬軍』また茂吉の自筆原稿を、詳細、綿密に照合して、その異同を克明に調べ上げた労作である。また該当する茂吉日記、佐藤佐太郎の日記をくまなく引用、一覧にしている、歌の背景の理解に役立たせている。今後『萬軍』さらには茂吉の戦争詠について研究、言及する人にとってまたとない精密な基礎資料となるであろう。一巻にまとめ上げた情熱と意欲は、実に並々ならぬものがある。

作者固有の見解はかならずしも前面には登場しない。そのため本著は「秋葉四郎著」ではなく「秋葉四郎編著」となっている。ここには先達へのふかい敬意と愛情、そして作者の腰の低さが投影されているかと思う。

## 力量と熱意と誠実さ

永田 和宏

斎藤茂吉の仕事のなかで、もっとも謎に包まれてきた歌集が『萬軍』であった。これが実は茂吉の元原稿のほかに、二冊の流布本があるという、きわめて刺激的な記述から本書は始まる。茂吉ファンならずとも、思わず前のめりに読みふけてしまう書き出しである。

佐藤佐太郎から茂吉の毛筆の元原稿を預かるという幸運は秋葉四郎氏のみに許された幸運であろうが、それをこのような丁寧な仕事にまとめたのは、秋葉氏の力量と熱意と誠実さの故であろう。氏は昨年文学博士の称号を受けられたが、本書では、評論というよりは、資料をもつて語らせるといふ研究書のスタイルが貫かれている。しかし、膨大な資料の中からどれを引用するかという選択においては、例えば『斎藤茂吉短歌合評』における、土屋文明の茂吉観など、確かな実作者の目が利いていてしばしば膝を打った。

## 定本『萬軍』の発掘

馬場 あき子

太平洋戦争末期の茂吉については、さまざま論がある中で、つねに言及されるのが、『萬軍』であった。しかし、この歌集の定稿についての一抹の疑義は薄もやがかかったままで、追求する余地の乏しさが難点であった。

此の度話題となった秋葉四郎氏の労作は、従来、それと考えられていた『萬軍』の二種の諸本を、茂吉自筆稿の『萬軍』に精緻な照合を行うことによって、自筆稿『萬軍』を決定的な定本として安定させた。これは大きな文学的成果である。

じつにミステリアスな経緯も、戦中戦後の情況の中で魅力的であるが、『萬軍』の評価については著者の見解はほとんど抑止的である。しかし、先人の言への畏敬のこもる細密な引用はかえって評価の歴史をみせているといえよう。

## 受賞のことば

秋葉 四郎

斎藤茂吉を論じているとき、大きな山に立ち向かうような充実感を抱くかたわら、全体像を見失い核心に迫るところまで行っていないという、ある種の焦りのようなものを感じる。九年前の『新論歌人茂吉』の時も、一昨年のNHKの放送テキスト『歌人茂吉人間茂吉』執筆のときも、更に今回の「茂吉幻の歌集『萬軍』」の時も同じだった。ありきたりの尺度では測りきれない、暈かざのようなものが歌人茂吉の残しているものから放射しているからであろう。それほど歌人斎藤茂吉は大きく、山にたとえれば世界の高峰だからだと、そういう時、私は、思うようにしてきた。山は、一つの頂上に立つと向うに更により高い山が見えてくる。歌人茂吉という秀峰は、私が努力して、仮に相当に高い山に達し得たとしても、はるか遠くにいよいよ高くそびえている存在のように思える。

そんな私に、この度名誉ある斎藤茂吉短歌文学賞を与えていただき誠にありがたく、心から感謝する次第である。私の作歌人生において大いなる誇りであり、忘れることのないよろこびである。

八年前、縁があり私は斎藤茂吉記念館の評議員の一人となつて以来、山形を愛し、蔵王に親しみ、上山に世話になり、もろもろの人の恩に預かって今日を迎えている。これを機に、そうした恩に酬いられる歌人として努力してゆく所存である。ありがとうございます御座います。



## 第24回 齋藤茂吉短歌文学賞受賞者歴

秋葉 四郎 (あきば しろう)

歌人。

1937年(昭和12年)、千葉県生まれ。75歳。

千葉大学教育学部卒業。

20代後半から齋藤茂吉の高弟佐藤佐太郎に師事。

短歌結社「歩道」編集人、現代短歌協会元理事、日本歌人クラブ会長、日本文芸家協会会員、齋藤茂吉記念館評議員、博士(文学)。

### 【主な著作等】

歌集：平成18年『東京二十四時』、平成19年『鯨の海』、  
平成21年『蔵王』、平成23年『自像』

著書：平成15年『新論歌人茂吉』  
平成21年『短歌清話—佐藤佐太郎随聞』  
平成22年『歌人茂吉人間茂吉』

受賞歴：昭和43年毎日歌壇賞、  
平成9年千葉県教育功労賞、  
平成19年短歌新聞社賞、  
平成19年文部科学大臣表彰。

これまでの受賞者

- 第一回 岡井 隆 『親和力』 砂子屋書房  
第二回 本林勝夫 『齋藤茂吉の研究―その生と表現―』 桜楓社  
第三回 塚本邦雄 『黄金律』 花曜社  
第四回 前登志夫 『鳥獸蟲魚』 小澤書店  
第五回 斎藤 史 『秋天瑠璃』 不識書院  
第六回 近藤芳美 『希求』 砂子屋書房  
第七回 小暮政次 『暫紅新集』 短歌新聞社  
第八回 馬場あき子 『飛種』 短歌研究社  
第九回 吉田 漱 『白き山』全注釈』 短歌新聞社  
第十回 佐佐木幸綱 『吞牛』 本阿弥書店  
第十一回 伊藤 博 『萬葉集釋注』 集英社  
第十二回 森岡 貞香 『夏至』 砂子屋書房  
第十三回 竹山 広 『竹山広全歌集』 雁書館・ながらみ書房  
第十四回 藤岡武雄 『書簡にみる齋藤茂吉』 短歌新聞社  
第十五回 清水房雄 『獨孤意尚吟』 不識書院  
第十六回 小池 光 『滴滴集』 短歌研究社  
第十七回 三枝 昂之 『昭和短歌の精神史』 本阿弥書店  
第十八回 花山多佳子 『木香薔薇』 砂子屋書房  
第十九回 永田 和宏 『後の日々』 角川書店  
第二十回 河野 裕子 『母系』 青磁社  
第二十一回 伊藤 一彦 『月の夜声』 本阿弥書店  
第二十二回 品田 悦一 『齋藤茂吉―あかあかと一本の道とほりたり―』 ミネルヴァ書房  
第二十三回 篠 弘 『残すべき歌論―二十世紀の短歌論―』 角川書店

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

九九〇―八五七〇

山形市松波二丁目八一― 山形県企画振興部県民文化課内

TEL・〇二三―六三〇―二三〇六